

1 得点分布及び小問ごとの正答率

〈表1〉得点分布

得点	人数	
	人数	%
100	0	0
90～99	6	0.9
80～89	37	5.5
70～79	99	14.8
60～69	161	24.0
50～59	149	22.2
40～49	118	17.6
30～39	74	11.0
20～29	19	2.8
10～19	6	0.9
1～9	1	0.1
0	0	0

*合格者の中から、無作為に抽出した670名(12.6%)の結果である。

〈表2〉小問別正答率(%)

大問	小問	正答率
㊦	問一	67.2
	問二	93.2
	問三	52.9
	問四	70.3
	問五	83.2
	問六	57.3
小計		69.6
㊧	問一	71.2
	問二	58.3
	問三	52.0
	問四	55.1
	問五	51.4
	問六	42.3
小計		53.7

大問	小問	正答率	
㊨	問一	43.5	
	問二	70.2	
	問三	58.5	
	問四	57.5	
	問五	17.3	
	問六	18.8	
小計		38.8	
㊩	問一	①	97.3
		②	72.4
		③	94.3
		④	71.2
		⑤	65.8
		⑥	60.2
		⑦	80.2
	問二	26.1	
	問三	42.5	
	小計		67.8

2 分析結果の概要

(1) 大問別正答率の経年比較

大問	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
㊦ 文学的文章	75.9	58.6	77.4	68.4	69.6
㊧ 説明的文章	50.1	61.2	68.6	58.2	53.7
㊨ 融合(古典・韻文・表現)	56.5	63.2	49.7	51.3	38.8
㊩ 言語事項・書写	65.1	74.4	73.7	70.4	67.8

(2) 正答率の高い問題 (㊩の問一を除く)

正答率	問題番号	問題内容
93.2	㊦の問二	文章の表現から登場人物の心情を推察し、選択肢の中から指摘する。
83.2	㊦の問五	文章の内容を的確にとらえた表現を選択肢の中から指摘する。
71.2	㊧の問一	文脈に即して、適切な接続詞を選択肢の中から指摘する。

(3) 正答率の低い問題

正答率	問題番号	問題内容
17.3	㊨の問五	和歌の鑑賞の内容を、指摘された観点から書き直す。
18.8	㊨の問六	俳句の内容を鑑賞し、資料を踏まえて自らの考えを的確に表現する。
26.1	㊩の問二	単語の活用について理解し、助動詞の文脈における働きを理解する。

(4) 得点分布、正答率からみた傾向

総点の得点分布において、70点以上の割合が昨年度と比べ11.0ポイント下がり、高得点者が減少している。大問別の正答率では、㊦の文学的文章問題が最も高く、㊨の古典、韻文、表現の融合問題が最も低い。昨年度と比較すると、㊦は正答率が上がったが、他の大問では正答率が下がっており、特に㊨は12.5ポイント下がっている。

小問別において正答率が高かったのは、㊦の「登場人物の心情を推察し、選択肢の中から指摘する」問題、「文章の内容を的確に捉えた表現を選択肢の中から指摘する」問題、㊧の「文脈に即して、適切な接続詞を選択肢の中から指摘する」問題である。正答率が特に低かったのは、㊨の「和歌の鑑賞の内容を、指摘された観点から書き直す」問題、「俳句の内容を鑑賞し、資料を踏まえて自らの考えを的確に表現する」問題である。また、㊩の「単語の活用について理解し、助動詞の文脈における働きを理解する」問題も正答率が低かった。

3 小問ごとの内容及びねらい (●は、主たる領域・言語事項 ▲は副次的領域・言語事項)

分野	大問	小問	内容及びねらい	設問方法			領域・言語事項			
				記号選択	抜出	記述	話すこと 聞くこと	書くこと	読むこと	言語事項
文学的文章	㊦	一	文脈に即して適語を補充することができる。 (副詞・四字熟語)	○					●	●
		二	文章の表現から登場人物の心情を推察し、選択肢の中から指摘することができる。	○					●	●
		三	文章の表現からその場の状況を的確にとらえ、適切に表現することができる。			○			●	
		四	文章の表現から登場人物の心情の変化をとらえ、適切に表現することができる。			○		●	●	
		五	文章の展開を踏まえて、内容を的確にとらえた表現を選択肢の中から指摘することができる。	○					●	
		六	文章の展開を踏まえて、文章の適切な表現の特徴を選択肢の中から指摘することができる。	○					●	
説明的文章	㊦	一	文脈に即して適語を補充することができる。 (接続詞)	○					●	●
		二	論の展開を踏まえて、内容を的確にまとめた表現を指摘することができる。		○				●	●
		三	論の展開を踏まえて、表現の内容をとらえ、その違いを指摘することができる。	○					●	
		四	論の展開に即して、文章の構成や組立をとらえ、文を正しく並び替えることができる。	○					●	
		五	論の展開を踏まえて、内容を的確にとらえ、要約することができる。			○		●	●	
		六	論の展開を踏まえて、文章の要旨と照合して適切な表現を選択肢の中から指摘することができる。	○					●	
融合	㊦	一	文の内容を踏まえ、文章の適切な話題を選択肢の中から指摘することができる。	○					●	
		二	漢詩の原文を参考に、書き下すことができる。			○			●	●
		三	漢詩の内容を踏まえて、内容を的確にとらえ、その内容を指摘することができる。			○			●	
		四	和歌のリズムや修辞法を選択肢の中から指摘することができる。	○					●	
		五	文章の展開に即して、和歌の鑑賞の内容を、指摘された観点から書き直すことができる。			○	▲	●	●	●
		六	俳句の内容を鑑賞し、資料を踏まえて自らの考えを的確に表現することができる。			○	▲	●	●	●
言語事項・書写	㊦	一	教育漢字を正しく書くことができ、常用漢字を正しく読むことができる。			○				●
		二	単語の活用について理解し、助動詞の文脈における働きを理解することができる。	○						●
		三	行書体で書かれた漢字をもとに、その字を楷書体になおし、さらにその総画数を識別することができる。	○						●

4 標準解答及び考察



〈標準解答〉

問一	エ
問二	ア
問三	(例) 貝殻拾いに熱中し、周囲のことが全く意識にのぼらない状況。
問四	(例) 迷子となり、たまらなく不安な気持ちであったが、頼りとする父母を見つけたので、安心した気持ちになった。
問五	イ
問六	ウ

〈考察〉

「わたし」が初めての海水浴で迷子になったという出来事の回想を通し、父母への思いや「ふるさと」への思いを、豊かな描写や表現を用いて描いているところが魅力の素材により、文学的文章の読解力をみる問題である。具体的には、副詞や四字熟語など、文学的文章における言語事項の基礎力や、叙述に即して、表現の意味や特徴、登場人物の心情、内容や主題を的確に理解する力等をみるとともに、豊かな心を育てるという観点にも配慮されている問題である。

文学的文章分野の全体の正答率は69.6%とやや高くなった。小問別では、登場人物の心情を推察し、選択肢の中から指摘する問二、文章の展開を踏まえ、内容を的確に捉えた表現を選択肢の中から指摘する問五は正答率が特に高かった。また、文章の表現から登場人物の心情の変化をとらえ、適切に表現する問四も正答率が高かった。しかし、文章の表現からその場の状況を的確にとらえ、適切に表現する問三、文章の適切な表現の特徴を選択肢の中から指摘する問六の正答率が低かった。

問三は「わたし」の状況を説明する問題であったが、それは「シンとした世界」という表現の解釈も含めて問われている問題である。そこで解答には自分の「解釈」を表現しなくてはならないが、受検生の解答は、「賑やかな浜辺で、貝殻を拾うのが面白くなり、熱中している状況」といった傍線部の前後を「抜き出し」ているだけの不完全なものが多かった。問六は筆者の文体、表現の特徴をとらえさせる問題であったが、誤答にはばらつきが見られた。要因としては、選択肢の中にあげられた「常体と敬体」「比喻や象徴」「擬音語や擬態語」などの修辞技法や、「臨場感」「論理的」「客観的」「視点」などの、「読むこと」の基礎・基本となるような学習用語の理解不足、またそれを文章の中で認識、活用する能力、技能の不足が考えられる。

全体を通しては、「心情の読み取り」に関する問題の正答率が高いが、「表現の解釈」に関する問題や「表現の仕方」に関する問題の正答率が低かった。そこで指導に当たっては、次の三点に留意する必要がある。

- 文章の描写や登場人物の心情の変化などについて、単なる読み取りや情報の取り出しに終わらせるのではなく、自分の知識や経験と関連付けて意味付けや解釈をさせたり、自分の意見を書かせたり、論じさせたりするなど、自分の読みを表現につなげるようにすること。
- 筆者の文体や表現の特徴などについて、ワークシートなどを活用して、なぜこのような書き方をしているのか、どのような工夫をしながら書いてあるのかなどの、表現の仕方や効果などに着目させるとともに、修辞技法や学習用語などの理解と活用を図ること。
- 学校図書館などを活用して、生徒の読書活動を積極的に促し、目的や意図を明確にした読書活動を展開することで、読書に対する必要感や自己を向上させようとする意欲を持たせること。



〈標準解答〉

問一	ア
問二	大自然の持つ恐ろしさ
問三	㉔
問四	エ
問五	(例) 自然のロジックは何かを目指すものではないのに対し、人間のロジックは目標を立て、その実現を目指すものであるという点。
問六	ウ

〈考察〉

人々が求めている自然とは原生林のような自然ではなく、山火事や人間の営みにより生まれるエコトーン（移行帯）であるということ、自らの体験や比較の視点を用いながら論理的に考察して述べているところが魅力の素材により、説明的文章の読解力をみる問題である。具体的には、接続詞や指示語、対比の視点の活用など、論理を読み取るための基礎力や、論の展開に即して内容を正確に読み取り要約する力、全体の要旨をとらえる力等をみるとともに、論理的な見方や考え方を養い、視野を広げるという観点にも配慮されている問題である。

説明的文章分野の全体の正答率は53.7%とやや低くなった。小問別では、文脈に即して適語を補充する問二は正答率が高かった。しかし、表現の内容の違いを指摘する問三、内容を的確にとらえて要約する問五、文章の要旨と照合して適切な内容の選択肢を指摘する問六の正答率が低かった。

問三は「㉑心安らぐ自然」「㉒そのような自然」「㉓こんな自然」「㉔ほんとうの自然」の中で、表している内容が他の三つと異なるものを選ぶという問題であったが、㉑という誤答が全誤答の約70%をしめている。しかし、本文を論の展開に即して吟味していくと、㉒、㉓は、㉑の説明になっており、この三つは同じ「自然」についての説明であることが分かるはずである。したがって、誤答は論の展開を踏まえずに選択肢の内容のみを判断していることが考えられる。問五は「自然のロジック」と「人間のロジック」の「違い」を説明する問題であったが、誤答例としては「自然のロジック＝意図的ではない本能的なもの」「人間のロジック＝意図的、意識的なもの」という対比の視点から違いを明確に表現するという点が不完全なものが多かった。問六は筆者の論理の展開を踏まえ、本文の要旨を理解しているかを問う問題であったが、アという誤答が全誤答の約70%をしめている。本文の最後の段落にある「人間のロジックを休めていると、自然のロジックが押し返し、エコトーンが生まれる」という内容を正確に読み取ると、アには人間のロジックはあるが自然のロジックが含まれていないので不正解であることが分かるはずである。全体で作者が述べていることを踏まえながら、筆者の展開する論旨を細部まで丁寧に読むことが必要である。そこで指導に当たっては、次の三点に留意する必要がある。

- ・ 文章の構成や展開を踏まえ、段落相互のつながりや筆者の論理の展開を、筆者の意見や感想などを区別しながら細部まで丁寧に読ませ、本文全体の論旨を思考の流れに沿ってとらえさせること。
- ・ 平素から、比較的長めの文章を読ませ、何について書いてあるのか、その要点をまとめさせる場を多く設定するとともに、それについて根拠を明確にしながら自分の考えや意見を述べさせること。
- ・ 抽象的な概念を表す語句や説明的文章の読解技能に関わる用語について意識させ、また、設問の条件に合わせた文のまとめ方や字数制限に合わせたまとめ方を意識させること。

三

〈標準解答〉

問一	イ
問二	時に微涼有り
問三	虫の音
問四	ウ
問五	(例) 嶋の飛び立つ音によって、かえって沢の静けさが強調される点
問六	(例) 表現上の工夫は、「香におどろくや」と切れ字が使われて感動が強調されているところです。また、すばらしいと思った点は、斧を入れた木から立ち上った香りに焦点を当て、そこから冬景色の下に息づく生命の力強さを私たちに実感させている点です。この句は私にももの見方の奥深さを教えてくれました。

〈考察〉

自分が興味をもった四季の素材を学校図書館で集めて鑑賞文を書き、先生にアドバイスを受けて原稿を修正、発表するという授業場面の設定を通して、古典の話題や内容を正確に読み取る力、文章を効果的に活用する力、素材を鑑賞し表現する力等をみる問題である。具体的には、古典の基礎としての漢文のきまりや和歌の修辞法に関する力、古典の話題をとらえる力、目的や必要に応じて読む力、情報を効果的に活用する力や、書くことの指導の観点から、与えられた条件をもとに文章をまとめる力、条件に従って自分の考えを表現する力等をみるとともに、読書指導や古典の優れた表現を味わうという観点にも配慮されている問題である。

融合分野の全体の正答率は38.8%と低くなった。小問別では、文脈に即して適語を補充する問二は正答率が高かった。しかし、文の内容を踏まえ、文章の適切な話題を選択肢の中から指摘する問一、和歌の鑑賞の内容を指摘された観点から書き直す問五、俳句を鑑賞し、資料を踏まえて自らの考えを表現する問六の

正答率が低かった。

問一は文の内容を踏まえ、文章の適切な話題を指摘するという問題であったが、ウの平家物語の冒頭部を選んだ者が誤答の約80%を占めている。たしかに平家物語と徒然草の内容は無常観という点では共通点をもっているが、この問題では文章の「話題」が問われているのであり、ア「月」、イ「をりふし」、ウ「人」、エ「旅だち」のどれについて本文で述べられているのかを押さえれば、解答を選ぶことが可能である。問五は和歌の鑑賞の内容を、先生のアドバイスを入れて「聴覚」の観点から書き直すという、資料活用力と鑑賞力を問う難易度の高い問題であった。誤答としては、聴覚の点からの鑑賞になっていないものが多く、視覚、聴覚、触覚などの知覚を内容にあわせて選択し鑑賞するという韻文理解の基本技能が使えていないものが多かった。問六は俳句の内容を鑑賞し、資料を踏まえて自らの考えや感想を表現する問題であり、具体的には鑑賞文が、①切れ字や季語、体言止めなどの表現上の工夫と効果について、②内容についての解釈や評価について、③自らの感想、の3点から構成されていることを踏まえて書くという資料活用と鑑賞、表現力を問う応用的な問題であった。生徒の解答としては、まず無回答が約30%を占めているが、これは例年とほぼ同程度で有り、決められた時間の中で表現する力を身に付けさせることが求められる。また、誤答例としては、表現上の工夫などの条件を踏まえていないものや、「冬こだち」という語が理解できていないものも多かった。国語の場合、語彙指導という観点は特に大切であり、それは国語の授業のみならず全ての言語活動の中で培うものであるという意識をもち、言語環境の整備や読書指導との連携などを図る必要がある。また、この問題で設定されている学習活動は、授業においては単元のまとめや発展で行われるものであり、日常の授業の中で生徒自らが考え、既習の知識や技能を活用して表現する場をいかに設定しているかが問われるものであった。そこで指導に当たっては、次の三点に留意する必要がある。

- ・ 歴史的仮名遣いや返り点、書き下し等の古典の基礎や、韻文の修辞法や鑑賞の技能などの基礎を的確に身に付けさせること。
- ・ 資料や情報を活用する、韻文を鑑賞するなどの読む学習と、それについて自らの考えや意見を書くなどの表現の学習の場を設定し、また書く際には必要な情報や、場面、表現する方法や、相手、目的などについての具体的なイメージを持たせ、与えられた条件を基に的確に表現させること。
- ・ 普段から読書活動や多様な言語活動を行うとともに、日常の自己の言語生活を豊かにする意識を持たせること。

四

〈標準解答〉

問一	① ごうかい ② おもむ ③ こうけん ④ 招待 ⑤ 展覧 ⑥ 試みる ⑦ 厚い
問二	イ
問三	エ

〈考察〉

文字力、口語文法力、書写の基礎的な力について、それぞれの理解をみる問題であり、日常の言語生活の向上を図るとする観点にも配慮されている問題である。

言語事項分野の全体の正答率は67.8%とやや高くなった。小問別では、問一の漢字の読みと書き取りの問題の正答率は77.3%であり、昨年度より6.9ポイント高くなった。しかし、単語の活用について理解し、助動詞の接続から品詞の識別を理解する問二、行書体で書かれた漢字をもとに、その字を楷書体になおし、さらにその特徴と総画数を識別する問三の正答率は低かった。

問二は助動詞の接続から品詞を識別する問題であり、具体的には断定の助動詞「です」が「体言」に接続するという知識を活用して解く問題であったが、ウという誤答が約70%をしめている。たしかに接続から品詞を識別する問題は難しくはあるが、教科書で既出の例文だけに、「です」と「ます」の接続の違いは判断できる内容である。文法事項の指導が文法の知識習得のための形式的なものとなることは好ましくないが、教科書で扱われている文法事項に興味を持たせることで、語の働きや文の作りに対する理解を深め、さらには言葉そのものに対する興味・関心を養い、日常の言語生活を豊かにしていくような指導は今後も大切である。そこで指導に当たっては、次の三点に留意する必要がある。

- ・ 漢字を読んだり書いたりすることは文字情報理解の基礎であるので、語彙指導の形態で取り出して指導することはもちろんのこと、読書活動などにおいても日常的に指導していくこと。
- ・ 文法指導においては形式的な指導になることのないように、文脈の中における働きや活用に着目させ、さらに文法の理解を他の言語活動における理解や表現に役立てるよう工夫すること。
- ・ 授業における書写の活動をとおして楷書や行書に対する知識や技能を高め、さらに文字感覚の育成や文字を丁寧に書く意識や態度を育成するように努めること。